

日本音楽舞踊会議コンサートシリーズから見えてくる電子オルガンの将来像

ピアニストから見た電子オルガンの魅力

北川 暁子（音舞会理事長）

「EL オーケストラによるコンチェルトとアリアの夕べ」シリーズと共生の可能性

戸引小夜子（音舞会副理事長）

「COMPOSITIONS」シリーズとオリジナル作品の可能性

西山 淑子（音舞会理事）

司会：阿方 俊 書記：森松慶子（文責）

阿方：日本音楽舞踊会議（以下、音舞会）はその半世紀以上の活動の中で、1990年より4半世紀にわたり、

「COMPOSITIONS」というタイトルで電子オルガンの新作演奏会を催してこられた。この演奏会のごあいさつをお聞きして、電子オルガン界の内側の人間がこの楽器について感じているのとは全く違った可能性に着目されているのを感じ、ぜひこの場でもお話したいということで、会としてのご講演を依頼した

北川：昨年音舞会50周年記念演奏会を東京文化会館小ホールで開くことができた。50年前、戦後間もない時期、安保で世の中は騒然としていた。音楽家個々人は無力かもしれないが、集まれば何かできるのではないかとということで作られたのが日本音楽舞踊会議である。現在舞踊関係は「休憩中」で音楽の活動が主体になっている。元来音舞会は作曲家が作った作品を実演する場を、という意欲に燃えて作られた向きが強く、当時ピアノ科の学生だった自分は、渡された作品を試演する、というところから入った。長年作曲家の故助川敏弥氏と、ピアノの深沢亮子氏のお二人を会の顔として、私はその下で理事長を務めさせていただいてきた。

ここ20年ほどで電子楽器のための作品を作る会員も増え、そういう方々が電子オルガンを使った作品発表会を、という試みが定着し、本年も行われる。私自身は電子オルガンを演奏したことはなく、初期の頃にはピアノの代用品の様なイメージがあり、接点のないうちに進化を遂げていた楽器である。知人のピアノ教師の話を知ると、自宅では電子ピアノで練習している子はタッチやペダルの使い方などで苦労する。電子楽器をピアノの代わりにするという発想には無理があり、ピアノにはピアノ、電子楽器には電子楽器の奏法なり表現世界なりがあると考えざるべきではないか。

ピアノはペダルやタッチのみを使って表現する楽器なので、そこに非常に繊細に神経を払う。自在なタッチを得るためのトレーニングにも力を注ぐ。その一方で、音色という要素に対して電子楽器を扱う人よりも鈍感になりやすいのではないかと感じる。ピアノを弾くこと自体の負担が大きいか、音の表情にまで至らず、指が速く動いたからマル、強い音が出せたからマル、という感覚が多く若い人にはあるのではないか。電子楽器奏者はもっと音色のことを考えていると思う。本来ピアノを弾く人もそうあるべきだが、なかなかそこに至らない。電子楽器を学ぶ人はそこまで至る可能性が大きいのではないかと羨ましく思っている。

ピアノの生徒がコンチェルトを演奏する際は、私がピアノでオーケストラパートを演奏することも多い。私自身がオーケストラと共演した経験で耳に入っている管楽器や弦楽器の音色感をピアノでもなるべく表現して、生徒が実際にオーケストラと共演する際、困らないようにしているつもりではあるが、電子楽器ならもっと楽に実現できるだろうな、と思ったりもする。

電子楽器は自分にとっては便利でありたい存在だが、それにとどまらない世界を皆さんが広げていってくださることを期待している。

阿方：電子オルガンの人はレジストレーションにこだわるが、ピアノももちろん音色の表現を考えて演奏されている。電子楽器でも、用意された音色をセットしたらそれでその音色が出る、ということにとどまらない演奏表現を深めるべきであろう。

ここで、音舞会が4半世紀続けてきたコンサートの軌跡をDVDでご紹介する。和楽器も使われているのでご注目いただきたい。

DVD：箏コンチェルト（電子オルガン2台）

ソプラノアリア（電子オルガン3台）

ピアノコンチェルト（電子オルガン3台）

以上3曲全て指揮者付き

DVDの中で、ピアノコンチェルトのソリストを務めておられた戸引先生に、音舞会の電子オルガンを使ったコンチェルトとアリアのコンサートについてご紹介いただく。



戸引：ここ数年、ヤマハのエレクトーンシティ渋谷の協力を得て、エレクトーンオーケストラによるコンチェルトとアリアの夕べを開催している。私はプロデューサー兼ピアノ奏者で最初から何度か出演してきた。

コンチェルトを弾くということはピアニストの夢であり、そのチャンスがあれば一度はやりたいという多くのピアニストが思っている。このシリーズには2度3度出演したいとおっしゃる方も多くいらっしゃいます。

エレクトーンの音色は機種によっても違いがあり、奏者個々の技術の差もある。また、オーケストラと一口に

言っても作曲家や年代による特色もあるのでエレクトーンで表現するのは容易ではないだろうが、年々楽器が進化し、先日の合わせ練習でもエレクトーンの弦の音色が良くなっていると感じた。木管、金管系にもさらなる進化を期待している。演奏会場であるエレクトーンシティ渋谷はデッドな環境なので、今年はピアノの音もマイクで拾って響きを出せるように工夫してみたい。このように毎年改良していけば、演奏者の理想の音楽に近づけるのではないかと。今年の本番も数日後に迫っているが、是非いらしていただきたい。

エレクトーンオーケストラとソリストの演奏が成功する一番の要は、指揮者の寺島康朗氏の存在だ。指揮者はエレクトーン奏者と数回の練習をし、ソリストが加わったところで、ソリストが勉強してきたことやテクニックを見抜いた上でエレクトーンのオーケストラパートをソリストにうまく合わせる技量をお持ちである。また、尺八コンチェルトなど、和楽器のための作品の演奏でも楽譜を読み込み、深く理解して指揮して下さる。音楽面のみならず、人間的にも奏者と良好にコミュニケーションが取れなければ演奏はうまくいかないが、寺島氏はこの点も非常に努力してくださっている。コンチェルトもアリアも安心してお任せし、満足のいく結果を得ている。阿方：ピアノも電子オルガンも、鍵盤楽器はソロ楽器とみなされやすいが、戸引先生がご紹介くださった電子オルガンによるピアノコンチェルトからは、充実したアンサンブルのあり方がうかがえる。次に、北川先生からも言及のあった、電子オルガンのアイデンティティを追求するオリジナル作品に関する音舞会の取り組みについて、西山先生からお話いただく。

西山：電子オルガンのために現代の作曲家が作品を書いて発表するコンサート「COMPOSITIONS」は1990年に始まり、本年11月25日に15回目が予定されている。初演再演含めて述べ86曲が発表された。このような取り組みを継続的に行っている団体は他にないのではないかと。日本で最も多くの新作を発表している団体であると自負している。オーケストラやバンドの代用と認識されることが多かった電子オルガンのアイデンティティを確立し、楽器としての認知度を上げるためには、この楽器のために書かれた音楽作品があることが大切である、という発想で、当時阿方先生がいらしたエレクトーンシティ渋谷とのタイアップで音舞会が始めたコンサートである。

電子オルガンの認知度はずいぶん上がってきたが、まだアイデンティティは曖昧であると感じる。多機能で多音色であることがアイデンティティの確立を難しくし、代用品、趣味で一人オーケストラができる、などなど玩具的な印象も払拭されておらず、芸術的な表現のための楽器としての認知度は低い。ヤマハのエレクトーンは誕生して57年。東京タワーと同じ年である。歴史が浅いのである程度は仕方がないことかもしれないが、この楽器のアイデンティティを意識して書かれたオリジナル曲を蓄積していくことで現状を打破することが、このコンサートの意義であると考えている。

これまでのコンサートの模様をDVDで少しご紹介したい。

DVD：福地奈津子作品 自作自演
安彦善博作品 演奏：山木亜美
菊地雅春作品 演奏：安藤江利

電子オルガン作品では、作曲家が楽譜を書いたら演奏者がストレートに演奏するのではなく、まずはレジストレーション、音作りをするという作業がある。レジストレーションの作業と作曲家の関わり方は、大きく5つタイプに分かれる。

1) 作曲家が演奏家のレジストレーション作業に立ち会って、演奏家と一緒に音を作るタイプ。作曲家の意向が直接反映される。

2) 例えば「星空のような」などの大まかなイメージをスコアに書き込んだ後は演奏家に任せるタイプ。演奏家のイメージによって様々な音色が生まれる。3) 全く作曲家は指示せず、演奏家にすっかり任せるタイプ。演奏家は第二の創造者である、というスタンスである。例えば先ほどDVDで作品をご紹介した安彦氏はこのタイプである。大まかなイメージを指示される作品よりも、さらに演奏家の自由度が高くなる。

4) 作曲家がオーケストラスコアに書いてエレクトーン奏者に渡すケース。本年のコンサートでは、私が初演させていただき高橋通氏の作品がその一例である。一旦オーケストラスコアに忠実な音作りをし、そのあと、演奏家のイメージで音色を別の楽器の音や電子音に差し替えてたりしている。作曲家が電子オルガンに馴染みがない場合は、電子オルガンの3段鍵盤に書かれたものが演奏家にとっては弾きにくい場合もあれば、機能などの使い勝手に沿わないこともある。そうした場合は、作曲家が書き慣れた形でイメージを表現し、それを演奏家が汲み取りながら電子オルガンとしての表現、その奏者なりの表現に昇華していくのも一つの良い方法ではないかと思われる。この方法のメリットは、この過程から、一つの作品のオーケストラ版と電子オルガン版が同時に生まれることである。また、演奏家にとっては、音の塗り絵、音の着せ替的な面白味を感じながらの作業となる。

5) 自作自演。思い通りのレジストで思い通りの演奏をする。電子オルガンの世界にはこのようなケースも稀ではない。

これら5つのパターンのそれぞれに、電子オルガンの機種変更による必然的な音色の改定もあり、同じストリングスという名前の音色でも機種とともに変わるので、作品は必ず時代とともに変化していくのが電子オルガンの特徴でもある。

作曲家が作曲をし、演奏家は演奏をする、という単純明快な線引きができないのが電子オルガンの面白さであり、そこにアイデンティティがあるのではないかと感じている。

さらに機種変更により音色も必然的に変化。同じストリングスでも変わるから作品は時代と主に変化。電子オルガンの特徴。今後は作曲家に電子オルガンのことをよりよく知ってもらい、作品を増やし、一般聴衆が繰り返し作品を開ける機会も増やしていくことが、電子オルガンの認知度を上げることにもつながると考えて、

「COMPOSITIONS」のコンサートを続けていく予定である。

阿方：以上、様々な側面から電子オルガンの音楽を追求する試みを語っていただいた。充実した取り組みを長年継続している稀有な団体として、今後のご発展をお祈りしている。